

14. 過疎化と学校教育－富来高校の例を中心に

聞 藝

- I. はじめに
- II. 特色ある学校づくり
- III. 地域と学校の関わり
- IV. 住民の意見
- V. おわりに

I. は じ め に

私が初めて県立富来高校に行ったのは1998年の6月、富来高校国際科での国際理解講座に講師として参加するためだった。その時、すでに実習調査は地頭町で行うことが決まっていたので、少し特別な感情を抱きながら、そこに着いた。

行く前には多くても20人くらいを集めて話しするのだろうと勝手に想像していた。しかし、実際に行ってみたら、生徒ばかりでなく校長先生始め、先生たちにいたるまでの真剣さに感動させられ、百人近くの人数に圧倒され、頭が真っ白になってしまった。これまで、日本の高校生と接触するチャンスもなかったので、高校生といえはすぐテレビで見た茶髪で、気難しそうな女子高生のイメージが頭の中に浮かぶ。しかし目の前にいた本当の高校生は元気で純粋であった。その後、国際科に関する様々な話を聞き、興味を抱いたのである。

国際科行事に参加したとき、高校と町は密接な関わりを持っていることに気づき、どうして県立高校の行事に町はこんなに力を入れているのだろうと思った。そこで、富来における高校教育と町の関係、その成果、過疎化の現状、そういった政策に対する生徒や親たちの反応などについて考えてみたい。

II. 特色ある学校づくり

1. 国 際 科

聞き取り調査の中で過疎化による高校存続に対する危機感が感じられた。富来町ではその対策の1つとして「特色ある学校づくり」を高校に要請した。このような動きの中で出来たのが国際科である。現在、富来高校には各学年に1クラスの国際コースがある。コースとして国際科が認可されたのは1993年である。しかし、校長先生の話によるとその実現に向けて方向を模索し始めたのは1991年のことであった。「特色のある学校」づくりという県教委の指定をうけ

てから、さまざまな試みを行ってきたが、1991年には「英語コース」を選択することの合意が形成されていた。さらに、コミュニケーションを重視する英語教育だけではなく、国際理解や異文化を理解する心を養い、国際的な視野と国際感覚を身につけ、広い世界を見る基礎づくりといった考えを改めて視野に入れ、また、「国籍、人種、性別、年齢、地位など」を意識しない人間と人間のコミュニケーションをできることを目標とし、「国際コース」を作るべきだという結論に達した。

国際コースの開設に向けて申請するときには3つの理由が挙げられていた。

1. 生徒の親は船員である者が多く、そのため外国に対する関心を持っている（この点については7章参照）。
2. 渤海交流の歴史がある。

日本は1300年も前に渤海国との間で200年にわたって交流を行っていた。その窓口だったのは能登国であり、福浦の港であった。このように国際交流は富来町の古くからの伝統であり、国際交流の歴史を引き継ぎたい。

3. 留学生の受け入れや、国際交流の実績や経験がある。

1981年、富来ロータリー・クラブのスポンサーシップによって、交換留学生制度が発足したが、これは国際交流推進への基盤であり、1993年までに、1年間滞在の交換留学生はカナダ、アメリカ、オーストラリア、チリから10名を受け入れ、カナダ、アメリカへ7名を派遣した。

新科目としては「国際交流」、「国際理解」が設けられた。「国際交流」は「国際交流全般に関する知識を習得させ、国際交流の重要性を理解させるとともに、国際交流活動を行うために必要な能力と態度を育成する」という目標を持ち、2年の1学期に「カナダ学」を教えている。実際のところ、この授業は「海外研修」への準備であり、「日系カナダ移民史に学ぶ」などのテーマから分かるように、カナダだけではなく、カナダへ渡った日本人がそこで少数民族として生きて行く中で経験したさまざまな困難について学び、資料の中に「日本にないといわれる『そういう伝統、習慣』を少しずつ日本の中に育ててゆくためには日系人の経験と知恵が役に立てば幸いです」と書いてあるように、そこから自国の文化や伝統を再確認し、外国で生活する上での必要事項を学習させるのがその狙いである。

「国際理解」の指導内容は「国際理解の理念、日本の文化と伝統芸能、異文化理解、比較文化、現在の国際関係」となっている。授業は主に英語で書かれた教材を使ってその内容を指導している。たとえば、温室効果、エイズ、臓器移植、国連などのトピックを取り上げたり、言葉に関わる話をして、日本語を考え直したりしている。

国際理解の実習として行うのは海外研修である。国際コースの海外研修は県内公立高校では初めての企画で、第1回は新聞で報道されるくらいであった。海外研修というのは国際コースの2年生が対象で、毎年7月中下旬に2週間くらいカナダのバンクーバーなどでホームステイ

を中心に行う。カナダをホームスティ先として選んだのは、カナダからの留学生とのつながりがあったからだ。1981年に最初の交換留学生として富来高校に来たのはバンクーバーのエレン・シュートハウスさんであった。彼女の母がバンクーバー地区教育委員会国際教育部長をしていたことがきっかけであったという。また、その他には、カナダは英語圏の中でも距離的に近い、アメリカより治安がよく、安全である、アジアからの移民が多く住んでいてモザイク社会であるなどの理由がある。

国際コースは海外研修のほかに「国際理解講演会」、「姉妹校交流」、「カナダ大使館ホームスティ」、「インターナショナル・セミナー」などがある。その中でももっともユニークなのは「カナダ大使館ホームスティ」である。この企画は部活などの理由で海外研修に参加できない生徒を対象に計画したもので、今年で4回目だそうだ。校長先生の話によるとこれはカナダの中で日本を探そうという考えからヒントを得て、日本の中で外国を探そうというアイディアが生まれたもので、東京にあるカナダ大使館の館員の家庭でホームスティをするものである。

2. 中高一貫教育

国際科と対応する形で富来町では1999年4月に富来中学校と富来高校が中高一貫教育実践研究校に指定された。1998年から2000年の間、3年間に渡って実践研究を行うことになっている。現在行っている活動は主に3つある。

1. 特色ある教科を開設すること。主に、英語教育、国際理解などがそれである。
2. 中学校と高校間の交流。これには教員の交流と生徒の交流が含まれている。英語の公開授業、中学生の高校への体験入学などの行事を通して交流を深めている。また、部活での相互乗り入れも考えているようである。
3. 入学者選抜。つまり、中高一貫となると今までの入学選抜方法も変わらなければならないので、今年から推薦入学の枠を拡大している。

富来町での中高一貫教育の中で、2つの主な研究テーマが挙げられている。

1. 国際コースで国際理解、異文化理解、英語教育によって、自他の人間性を尊重できる人間に育てる。富来高校の国際コースとの一貫性を作るため、富来中学校では国際理解を選択授業とし、映像教材などを用いて、外国の風俗や習慣を紹介している。
2. 自分の住む地域の文化を学び直しながら町、家族の一員であるという自覚を持つ人間に育てる。つまり地域の文化を学ぶことを通して、自分のアイデンティティを再認識させようという狙いが込められている。具体的には地域の産業、文化、歴史を研究対象とする「富来学」をつくって、1999年4月から開講する予定である。

現在行われている中高一貫教育は6年制中等教育学校、中高併設型、中高連携型の3種類があるが、富来町の場合は最後の連携型に当てはまる。連携型は地区内の中学校から高校へ進学する人が60%以上という条件があるので、県内でもこの条件に該当するのは富来高校と門前高

校の2校しかないという。富来高校の場合は毎年富来中学校から卒業生の80%以上が富来高校へ進学するのでこの点では問題にならなかった。また、中高一貫教育の実施によって勉強意欲が減るのではないかという心配もあったが、先生たちの話では、今見たところではまったく例年どおりであるという。

富来中学校のほうは入試のための勉強ではなく、中学校教育から受験勉強を省いて、ゆとりのある教育ができると主張し、また、富来高校は英語教育などの場合、高校だけでは解決できない問題は6年間を見通した計画的な教育指導ができると積極的に取り組んでいる。

Ⅲ. 地域と学校の関わり

1. 過疎化

国際科設立の背後には富来町全体の過疎化という社会的な背景がある。『富来町史』の中で「急激な児童数の減少は全国共通の現象であるが、特に過疎傾向の濃い本町ではその傾向が著しく、あちこちで学級定数を割り、複式学級を生ずるようになった」の言葉が示すように、富来町の過疎化は深刻な問題である。

富来町の児童数は1960年代をピークに、その後年々減り続けている（第11章表-1、2参照）。これは当然中学校と高校の生徒数の減少につながっている。表-1に示すように富来中学校の卒業者は1990年以後の数年間で確実に減っている。そして、1996年度、富来中学校の3年生の数はさらに減って、117人である。富来高校の生徒数の変化からもこの傾向が見られる。1973年の生徒数は525人に対し、10年後の1983年には412名となった。その影響でもともと1学年4クラスだったのが1981年には3クラスとなったのである。また、将来は2クラス校になると予想されている。

表-1 富来中学校卒業年度別進路状況

	1989年	1990年	1991年	1992年	1993年
県内公立	206	187	190	170	170
国立	2	0	2	0	1
県内私立	5	2	7	3	7
就職など	18	25	7	3	3
卒業生総計	231	214	206	176	181

資料：富来中学校『十周年記念誌』

ここで注目したいのは高校への進学率の上昇である。「昔高校に進学できた人は裕福な人だけだった」という意見は多かったが、表－１で現れるように中学校を卒業してからすぐ就職する人は、1991年頃から著しく減ってきた。また、先生たちの話では最近では就職希望者がほとんどいなくて、ほぼ全員が高校に進学するそうである。同じような現象は高校でも起こっている。高校卒業後進学したいと思っている人は60%以上を示している。このような進学率の上昇は過疎化の過程においても重要である。なぜなら、高学歴による若者の転出は過疎化の大きな要因だと考えられるからである。

富来町にとって農業、漁業、船員が主な産業であった。工業など若者の希望するような就職先が少ない。調査先の地頭町では商業が盛んだったが、「若者に仕事がない」、「跡を継ぐのを強制する気がない」、「店はこの代で終わってもいい」といった意識を持つ人は少なくなかった。実際、高校を卒業した若者の多くは県内外の大学、短大あるいは専門学校に進学している。たとえば、1989年の富来高校の卒業生192名のうち大学、短大、専門学校などに進学したのは128名（67%）で、就職した人は64人（33%）だった。この64人の中で、県内に残ったのが19名で、さらに、富来町内で就職した人は数人しかいなかった。この傾向は近年はさらに強まっており、最近卒業後、就職希望の生徒は約30人ほどという。その理由はもう勉強したくない、公務員に高卒で就いたほうが有利だと考える人が多い。その中、富来町内で就職する人は5人以下（まったくいない年もある）、それ以外はほぼ金沢周辺に働きに行く。しかしこうして大学、専門学校を卒業してUターンしようとしても、公務員になるのが大半で、ほかの職業に就こうとしてもなかなかできないのである。たとえば地元の縫製工場で働いているのはほとんど中年の女性で、仕事としてはパートしかない。また外国人労働者の雇用増加に伴って、日本人船員の数も減り、船員離れも急速に進んでいる。つまり、就職先という点に関していえば、地元では職種の幅が狭く、若者にとって適切な職に就くのは難しいというのが現状である。

このように、少子化による若者の減少、高学歴化に伴う若者の転出などの要因が重なって過疎化が進んでいる。このような背景があって、町内から緊迫感が生じた。つまり、町内に1校しかない富来中学校から進学条件や、交通面などの理由で近くの他の市や町にある高校への流失を防ぐには、富来高校を魅力のある高校にしなければ生き残れないという危機感が高校側と町で生じたのである。これがまた「特色ある学校づくり」の背景ともなっている。

2. 町との関わり

前節で述べたような現状もあって、富来高校を存続させるために、町のほうからさまざまな援助をしてきた。なぜ富来高校を存続させなければならないのかというと、町に高校がなかったら、中学校を卒業した生徒は別の町の高校に行かなければならない。そういう状況になれば、少子化で少なくなった若者がさらに減り、地域全体が活気のない町になってしまうからである。また、地元の高校に通うことによって、地元への愛着感が生まれ、地元に残ることやUターン

することに直接に関連するので、地域振興につながる。そのため、町としてはせめて高校までは若者が町内に残ることを強く望んでいる。富来高校には「富来高校教育振興会」がある。その会長を務めているのは富来町長で、顧問は町選出の県会議員、町助役、町収入役、町教育長などである。このような組織のほかに、町から国際コースの行事に対して多額な資金の援助を出している。海外研修の時、町から参加者へ8万円の補助を行っている。その総額は年間300万円前後だという。また、国際理解講演会のために200万円の補助金を出している。そのほか、姉妹校交流でくるカナダ人学生の金沢までの送迎バスの代金、見学施設の入場料金、さよならパーティの食料費などの出費は「国際コース基金」から出されている。

一方学校側の教育内容もはっきりと町の要望を反映している。富来高校が国際科を設立する際に文部省に出した申請理由の中で「渤海交流の歴史がある」というのがある。これも町が地域振興のために考え出したアイディアの1つではなかろうか。1997年の新聞に「富来町が渤海国交流の拠点として、将来的に幻の能登客院の再現を計画したい」、「中国でも各地の遺跡を地域振興に役立てたいと考えており、富来町と同じ状況にある」というような記述があった。明らかに、歴史を再現したり、能登客院を作ったりすることで観光客を呼び、若者に職場を提供することを狙いとしたもので、これは町として地域振興のために積極的に進めたい計画である。このような計画があえて国際科申請の理由と関係づけられている点からも町の過疎化対策の影が伺える。

そして、中高一貫教育のもう1つの特徴としてあげられたのは、地域に愛着を持つ子供に育てるということである。そもそも中高一貫教育の目的は6年間で計画的、持続的な教育指導体制を整え、より生徒の個性を伸ばせるような教育を展開することである。インターネットを通して、いくつかの中高一貫校の教育方針を見てみたが、その多くは6年間でゆとりのある効果的な学習ができ、特に6年間を通して無理なく、重複や空白のない合理的なカリキュラムが編成でき、計画性のある教育活動がなされると主張している。「ゆとりのある6年間」、「個人を生かせる教育」といったキャッチフレーズが強く印象に残った。しかし、富来での中高一貫教育導入の狙いは「広報とき」1998年12月号にあるように、ゆとりのある計画的な教育のほかに「地域の自然、社会、人材を活用した体験活動による情操教育を推進する」と書いてあったし、また、2つの研究テーマの1つとしてあげられたのは町、家族の一員としての自覚をもつ人間の基礎づくりである。地域文化に誇りを持つ人間に育てるために、地域に学ぶ新しい「部」の創設も考えているようだ。町はこうした教育によって、少しでも地域に残る若者が増えることを望んでいるのだろう。

IV. 住 民 の 意 見

これまで、町と学校側が学校の存続と地域振興のために行ってきたことについて述べたが、それはあくまで公的な立場からみたものであり、ある部分までは町の現状を反映している。しかし、それは必ずしも町のすべての住民の意見と一致するものであるとは言えない。国際科申請の3つ目の理由に、町には国際交流の経験があるというのがあった。しかし、実際には「富来の人は外国人を避けてしまう傾向がある」という人もいるし、初めて姉妹校交流でホストファミリーとしてカナダからの学生を受け入れる時も、けっして順調とは言えなかった。一般からは1軒か2軒しか応募がなくて、町から頼み込んでぎりぎり間に合ったといった具合である。基本的には国際科の生徒の家という条件があったにも関わらず、結局校長先生の要請で受け入れたともいう。このような環境下に置かれている親や子供たちの意見はもっと現実的なものであり、情緒的なものでもある。以下では公的な立場から離れて、富来町の高校教育の現状についてさまざまな人の意見をみてみたい。

1. 大人からの意見

全体としては町側の高校に対する思いが町民に伝わっていたような意見が調査の中で出ていた。例えば「学校の存続にとっていい」という意見が聞けた。町には高校が1つしかないから、入学者の多くは町内の人だし、現在町に住んでいる人の多くは富来高校を卒業した人なので、富来高校を町の高校と考えていて、こういう理由で学校の存続問題に関心を持っているという。しかし、実際こういう意見を持つ人たちの職業から見てみると、町の職員をしていた人や、教育に何らかの形で特別な関係を持っている人が多いようである。

また、特色ある学校を作ることによって学校レベルの低下を防ぐことが出来るのではないかと期待する声があった。Aさんが「大学などに進学したいと思う子は羽咋高校、七尾高校に行く傾向があった。しかし、富来高校に国際科ができて、人気上昇の傾向がある」という。これまで、富来中学の上位の生徒が進学校である羽咋高校などに出て行き、その代わり、他の中学校から下位の生徒が富来高校に入ってくる傾向があったので、富来高校はレベルの低い高校になる、しかし、国際コースなどを設置することによって、優秀な生徒の外への流出が防げるというのである。

「身近であった高校が中高一貫教育によって、さらに身近になった」という意見もあった。1年か2年上の先輩たちがその後、どうしているのかをみて、子供たちが自分たちの将来について考え、進路を選ぶ時有益な参考になる。また、高校に入るときすでに高校の生活や高校でどんなことをしているのかについてある程度を知っているので、安心感がある。これは子供にとってよいことであると同時に親にとっても安心感をもたらすはずである。

2. 子供たちの反応

子供たちはまた親たちと違って、この一連のことを単純に受け止めているようである。羽咋高校を受験すれば、滑り止めに私立高校も受験しなければならない。しかし、富来高校を受験すれば、どうせ受かるなら、滑り止めの学校を受けないという。つまり、富来高校に行けば、受験勉強をしなくてもいいので、それを理由として富来高校を選んでいる生徒もいる。一方、富来高校の国際科に進めばカナダ旅行に行けるという理由で、国際科に入る人も多いようである。

実際、国際科に入ってから感想を聞いてみると、1年生は「たくさん英語をやったけど、普通」という。この話から少なくとも、1年生の時点で学校側の教育方針が生徒には、必ずしも充分伝わっていないといえよう。生徒の多くはカナダ旅行の魅力に引かれて学校に入り、国際科は英語教育を重視し、英語イコール国際化という意識を持っているようである。

ところで、海外研修を終えた2年生の子はまったく別の意見を持っている。「海外研修で異文化理解も大事だと思った」、「会話できるようになりたい」というふうに変わった。1996年度国際コース海外研修アンケートの結果では、海外研修はあなたのためになったと思いますか、という質問に対し、全員が大変ためになったと答えた。そのほか語学研修はどうですかという質問に対して、よくなかったと答えた人はクラスで2人しかいなかった。よかったと答えた理由は「いろいろなものが見れ、学べた」、「より英語が好きになった」、「前より勇気が増した」、「外国人と話して分からなくても、何とか自分でやらなければならないので、ためになった」などがあつた。学校側の異文化理解、外国の文化を学ぶことで自分の文化を見つめ直すという目的にはまだ達していなくても、生徒にとっていい経験となったのは確かである。

V. お わ り に

実際、子供たちと地域の関わりは学校以外にも存在しているのではないかと思う。祭りを通して子供たちは地域と強い絆を築いているようである。教育現場で生徒の祭りへの参加は好ましくないものとされているが、生徒の話では祭りが大好きで、卒業した先輩もその時帰ってくるので夏になると楽しみにするというほどである。富来高校では後輩と先輩という序列意識が薄く、非常に仲がよいといわれる。それは祭りなどの学校外の活動の場によって、つながりを持つからだという。子供たちの祭りへの参加は地域の理解を目的とした活動というレベルで行っているとは言い難い。しかし、こうした活動への参加によって、意識しないうちに地域への愛着感が生まれるということと言えるだろう。

「特色ある学校づくり」は確かに一定の効果を挙げていると思われる。私には富来町には地元への愛着を持つ人間が多いような気がする。なぜなら、調査の中で多くの人が若者の流出、

高齢化などの問題に関心を寄せている。富来町では11年前の人口が約1万8千人だったが、今は1万人前後だという。しかし現在、出生率が減っていることを考えると、一回外へ出たのちに、戻ってくる人もある程度いるのかもしれない。これを支えているのが地域への愛着ではなかろうか。

しかし、高学歴化社会の中、職業に対する人々の意識は大きく変わり、長い学校生活を経て就職するという過程において多くの人と出会い、より多くのことを経験し、自分の生きる道も多様になるのは当然のことである。聞き取りの中で「高校を卒業したら、富来を出て、もう二度と帰ってこない」とはっきりいった女の子の声が響く。こう考えている高校生は少なくないはずである。いったん外へ出た人はなかなか戻れない。前述したように、適切な職を見つけにくいのは原因の1つではあるが、都会の生活になれた人には近所付き合いなどを含む田舎の生活に慣れるかどうか、受け入れてくれるかどうかなどの心配も存在しているのである。教育のレベルだけではなく、就職のチャンスを増やしたり、帰ってこられるような環境を作ったりすることは今後の課題になるのではなかろうか。